

幸稔見汐  
対談

保育  
十 $\alpha$

プラスアルファ

第87回

## 安發明子

さん

●フランス子ども家庭福祉研究者

あわ・あきこ

◆プロフィール

1981年、鹿児島県生まれ。一橋大学社会学部卒業。全国とスイスで児童保護分野の機関のフィールドワーク調査を行い、「親なき子」(ペンネーム: 島津あき)を出版。生活保護ワーカーとして働いたのち、2011年に渡仏。フランス国立社会科学高等研究院健康社会政策学修士、社会学修士。

「何かあったら相談して」じゃなくて、

子どもの権利を保証するためだから、とあまりにも情熱的

# 教育の目的が、フランスは 責任ある市民を育てること

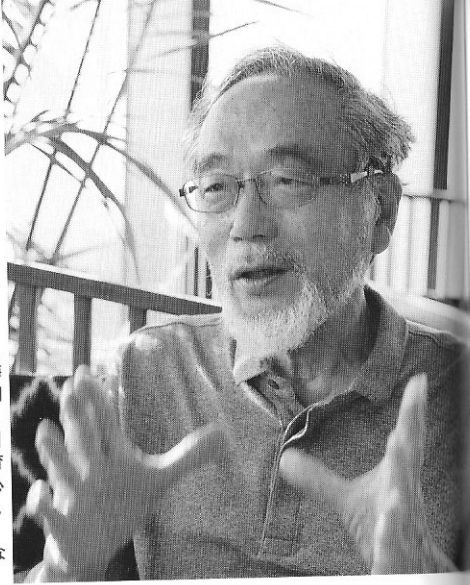
日本の合計特殊出生率は、年々過去最低を記録し続け、最新の数値では1・26と報告されています(令和4年人口動態統計より)。一方、フランスでは、1970年代以降は日本と同じように出生率の減少が続いたものの、2020年には1・83と先進国の中ではトップクラスとなっています。それは、少子化対策をしたわけではなく、家族政策を充実させた結果といわれています。実際にどんな支援が行われているのか、パリ在住で、フランスで妊娠・出産・子育てを経験されてきた安發明子さんにお話をうかがいました。



## 子どもが ルール違反をしたら、 叱るのでなく、教える

汐見●日本はこれから子ども家庭庁ができて、子どもについての行政が二歩も三歩も進むのでは、と期待しています。でもそのためには、これまでの子どもについての考え方や行政の姿勢を抜本的に改めないと実際の成果は上がらないのでは、と思っています。

とくに当事者である子どもの声を聞く、子どもの意見を尊重するということについては、日本はまだまだ遅れていると言わざるを得ません。安發◆フランスの街中で地面にひっくり返って「イヤー」って泣き叫んでいる子がいたら、たいがい日本人なんです。そういう意味では、フランスでは赤ちゃんのころから、市民としてのあり方を求められていると思います。



汐見稔幸  
(しおみ・としゆき)  
●プロフィール  
1947年、大阪府生まれ。東京大学名誉教授。白梅学園大学名誉学長。専門は、教育学、教育人間学、保育学。「エデュカール」編集長。臨床育児・保育研究会等、保育者を中心とした研究会を複数主宰。近著は『教えから学びへ教育にとって一番大切なこと』（河出書房新社）。

や心理面で心配がないかを専門職がチェックします。

出産後も、退院して48時間以内の助産師訪問が義務づけられていて、私の場合はさらに1日おきの訪問が続いて、しかも毎回1時間ぐらいはありました。だからそこで、いろ

たとえば、レストランなどで子どもの声が大きいと思ったら、お母さんがチラッと子どものほうを見るだけで、その子はもう黙ります。この場所でするときはこういう態度なのか、小さいときから身につけているからです。

だから、子どもが入っちゃいけないレストランもないし、入ったからといって子どもが騒ぐわけでもありません。

それはおそらく、フランスの教育の目的が「責任ある市民を育てる」ということだからだと思います。そのために、何かルール違反をしたら、怒るとか叱るではなくて、教える。日本では、その共通の土台がないように思います。

汐見●そうですね。子どもだから騒いでもしょうがない、という発想になります。日本の人たちがフランスの子どものそんな振る舞いを見たら、

んなことを話します。

そのあと、毎週行く保健所でも、心理士さんが話しかけてきてくれて、何度も言われたのが、「あなたが一番赤ちゃんのことをわかっているはずよ。だから、あなたの赤ちゃんに聞いてみなさい」と。

でもやっぱり、何かあったときはネットで調べるじゃないですか。たとえば、「母乳が出ない」だったら日本のサイトには、「このハーブティーを飲みなさい」とか「〇〇を食べなさい」「今〇〇しないとあとでこうなる」って、もうノイローゼになりそうなくらいにたくさんのご書かれています、かえって不安になります。

フランスで私がかかっていた助産師さんからは、「母乳が出なくても、あなたには別の才能があるじゃないだからそっちの才能を生かせばいいのよ。そのことで落胆するよりも、

どうしてそんなことができるんだろ、とみんな驚くかもしれないね。

## 専門職がいつも身近にいて 育児をサポートしてくれる

汐見●以前、私の友人がやった調査で、フランスで育児をしている女性たちに「育児雑誌や育児本に書いてあることと、自分の子どもの様子が違っていた場合、あなたはどのように思いますか?」という質問をしたんです。

一番多かった回答は、「この本には私の子どもが書いていないから役に立たない」というものでした。日本だと「私の子どもがおかしいんじゃないか」と思って心配する人が多いと思います。その違いは何だと思いますか?

安發◆フランスの場合、専門職がずっと身近にいるんです。

まず、妊娠初期面談が義務づけられていて、医療面だけでなく社会面

好きなことをして安心して過ごしているほうが、赤ちゃんは喜ぶと思うわよ」と言われました。

そうやって専門職がいつでも近くにいるから、ネットで検索しなくても、困る前に聞くことができます。

## 子ども関連の 仕事の人たちが みんなあまりに情熱的

汐見●専門職がいつも近くで、一人ひとりを丁寧にサポートしてくれるのです。

安發◆私も子どもが生まれるまでは、フランスの人ってなんか雑だし、あまり丁寧じゃないしって思っていたのですが、子ども関連の仕事をしている人がみんなあまりに情熱的で、かなり見直しました。

たぶん意識が違うのだと思います。何かあったら相談して、ではなくて、



安發◆フランスでは中学1年生で、1週間フルタイムの職場実習が義務になっています。で、実習先は自分で見つけてこなさなければいけません。

日本からの駐在家庭の子が大使館とカルイ・ヴィトンの実習をサクッと見つけてくるのに対して、地元の子が「パン屋さん5軒も回ったけど、全部忙いって断られた～」というケースもあります。

やっと見つけて働いても、1週間やってみたら、パン屋さんって大変だったとか考え直して、また別の道を考えたり。

汐見●そうやって中学生のころから、実践的に社会で学ぶ仕組みがあるのですね。

自分が担当しているこの子の権利を保障するのが私の役割だ、というように。

日本で福祉関係の職員の地位が低いといわれていますが、フランスの専門職の人たちは、職業の価値を高めることも、自分たちの役割の一つであると考えているんです。

たとえば、今度クラウドファンディングで、フランスの在宅支援の現場で働いているエデュケーターが描いた漫画の日本語版が、2月に出版されることが決まったんです。すごくいい本だから、これもぜひみなさんにも読んでほしいんですけど。

彼らは、この現場で働いているだけでは不平等な世の中がなくならないからって、そこにいる子どもたちの生きざまや、その子どもたちに寄り添う専門職の姿を、漫画で描くことで世の中に伝えていこうと考えたんです。そうすることで、エデュケ

れているからです。たとえば、英語文献だとか書いてあるけど、スペイン語文献ではこんなことが書いてあったとか。

それを毎回レポートの度に行うの

ーターって大事だと世の中に理解してもらえないし、職業の価値を高めることができるかと考えたんですよ。

### 実習生の受け入れは、情熱を継承すること

汐見●今、話に出た「エデュケーター」というのを、読者にもわかるように紹介してもらえますか？

安發◆フランスにはソーシャルワーカーだけでも13職種あって、その中でもとくに児童保護や障害福祉、成人の自立支援などで中心的な役割を担っている国家資格です。

入り口の発端は学校であることが多いのですが、学校で集中できないとか、ちょっと攻撃的だとか、何か心配な時点でエデュケーターが家庭内に入って、何を解決すればその子の調子がよくなるかをサポートします。

たとえば、お母さんが体調が悪い

のかもしれないし、お父さんが失業中で精神的に不安定なのかもしれないし。家庭に入って親と話したり、家族とご飯を食べたり、週末に一緒に旅行したりもするので、ときに親戚のおじさんおばさんみたい、と言われることもあります。

日本でエデュケーターっていうと、宿題を見るんですか？ みたいに見えることもあるんですけど、社会の中でどういうふうに分が生きていくのか、家庭と社会をつなぐ部分が「エデュケーション」なんですよ。

汐見●とても大事な仕事ですよ。エデュケーターの養成課程はどんなふうになっているのですか？

安發◆エデュケーターの専門学校は3年間で、第二外国語まで必須なんです。言語として学ぶという意味ではなくて、毎回レポートの度に、第二外国語まで使った文献を調べて、自分の課題について書くことが課さ

で、実務に就いてからも、常にいろんな言語も含めて広く情報収集する

のが当たり前になっていっているんです。汐見●それはレベルが高いですね。

安發◆専門学校に入ったら、1年間に自分で賃金を支払って雇用してくれる実習先を、自分で探さないと、その学校に通い続けることができないんです。だから、現場にある程度認められる人でないと、学校を継続することができません。

そして、1週間の現場実習、1週間の座学というのを繰り返して、具体的に現場での自分の対応はどうだったかを学校で考えて、理論に落とし込んでいきます。

それを毎年、別の分野の施設、たとえば母子生活支援施設とか障害者施設とか、で実習をやらなければいけない。だから、3年たって卒業するときには、ある程度自分はどういう分野が得意か、ちゃんと見えてい

るんです。

しかもそのうちの1回は、海外での実習が推奨されていて、そのときの生活費や交通費は国がすべて負担します。

汐見●それはすごいな。実習生の受け入れが、現場の負担になるといった声はありませんか？

安發◆聞いてみたら、「これが情熱の継承なのよ」って。もしこの子がこの職場に就職しなくても、あの仕事すごくよかったよって周りの人に伝えてくれることが、自分たちの仕事にとって価値あることなんだと、彼らは考えています。

### 生後10日目の赤ちゃんにもアクティビティを提案する

汐見●話は変わりますが、フランスの保育で印象に残っていることはありますか？

安發◆娘が生まれて10日目ぐらいの

ときに、保育園の面接に行ったんです。この園では一切押し付けはしないけれども、自分が好きかを知って、それをとことん追求すること、それを大事にしている、という話をされました。まだ10日目の赤ちゃんのなについて、私には全然ピンとこなかったんですけれど。

そのあと実際に四つの部屋で4人の先生が、生後10日目の娘に対して、それぞれにアクティビティを提案していました。音の出るおもちゃとか、いろんな形や感触のおもちゃとかを「ここがいい?」「これやってみる?」と言って、子どもが選ぶんです。

先生たちはそうやって毎日、今日はどうなことをやってみようかなとか、どんどんクリエイティブになっていくと思うんですよ。

あと、フランスの園には親が参加するイベントみたいなものはまったくないのですが、毎週一回、保護者

が順番に授業をする日が設けられていました。これは決して義務ではないんですけど、全国的に行われています。うちの娘の園の場合は、毎週金曜日の午前中がその時間でした。

私は子どもの権利について、今年はどうな授業をやるのかな、と毎年楽しみにしていました。

子どもたちにとっては、いろいろな職業を知る機会になったし、大人たちへのリスパクトもとても高まったと思います。大人たちが頑張っているってつくって、今のこの暮らしがあるということ子どもたちが学んでいて、すごくいいなと思いました。それから、私が授業をした日には、「ほら、私のママこんなお仕事しているのよ」って、娘がすごく誇らしげだったのも印象的でした。

もちろん仕事の話じゃなくてもいいんです。たとえば、野鳥保護をしているお父さんだったら、スズメの

生態の話をしてくれたり。

汐見●それだったら、お金もかからないし、準備もそんなに必要ないから、日本の園でもすぐにまねできそうですよね。

まだまだお話をうかがいたいところですが、時間がきてしまいました。ほかにもいろいろ参考になる実践が紹介されているので、読者のみなさんには、ぜひこの本を読んでもらいたいですね。今日はありがとうございました。

安發さんの最新著書  
『フランスの子どもの育ちと家族』

一人ひとりに届ける福祉が変える  
フランスの子どもの  
育ちと家族



安發明子著  
(かものがわ出版)

安發さんの実体験をもとに、フランスで行われている子どもや家族を支える福祉について、詳しく知ることができる一冊です。